

歌舞伎評判記のことわざ：野郎評判記を中心として

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/23715 |

歌舞伎評判記のことわざ

——野郎評判記を中心として——

古保 勲

一はじめに

歌舞伎評判記とは、初期において歌舞伎若衆を対象とした野郎評判記と、後にすべての役柄の俳優についてその技芸を評した役者評判記とを併せて新たに名づけた凡称であるが、そのうち、万治三年刊『野郎虫』より元禄七年刊『やくしや雷』までの野郎評判記の中で用いられていることわざについて考察をした。

テキストとしては『歌舞伎評判記集成 第一巻』（岩波書店刊）を用いた。

二野郎評判記について

芸能辞典の「役者評判記」の項では次のように解説されている。

「歌舞伎役者の容色、技芸を評判した書。単に評判記といえは役者評判記の外に、遊女の細見記や、各種の芸能・文芸等に関する評判の書の総称。評判記で最も古く流行したのは遊女評判記で、諸種評判記の源をなす。明暦元年（一六五五）刊の京都鳥原の「桃源集」の外、江戸、大阪のものが出たが、何れも遊里の案内、遊女の細見で、半ば実用的のものであった。この遊女評判記にならつて役者評判記が起つた。明暦二年刊の「役者の噂」が最初といわれるが、

現存のものでは、万治年間の「野良虫」が最も古い。万治より天和頃迄は野郎評判記時代で、この時代のもは遊女評判記と同様、野郎の名と年と抱主を記し、その容色だけを品評し、技芸の巧拙には及んでいない。貞享から元禄にかけて、劇的要素の発達につれて、漸次技芸の品評に重点が移った。即ち野郎評判記から純粹の役者評判記にまで脱皮したのである。そして貞享期の評判記に位附が初まり、技芸評も更に細かくなった。かくて元禄十二年（一六九九）京都の八文字屋より、江島其磧の新企画による、京・大阪・江戸の三都の役者を細評した「役者口三味線」三冊が現われた。これは立役、敵役等の役柄に分類した役者を公平な立場で等級をつけ論評したもので、その説物としての新形式と評言の妥当とが大いに迎えられ爾来、この口三味線の体裁が踏襲され、役者評判記の型となった。」

以上のことを野郎評判記の作品で考証をしてみよう。

万治三年「野郎虫」から寛文、延宝の評判記、天和三年「難波の貞は伊勢の白粉」までは、内容として面体、姿などほとんど容色に関するものが多い。しかし、貞享元年「野郎三座詫」からは、げいぶり、舞ぶり、諸芸等技芸の評も出てくる。貞享四年「野郎立役

舞台大鏡』では、凡例にもあるように、

一役者げいのくらしいをみて上中の二段にわかち紋下におゐてこれをするす(凡ノ一ノオ)

位附が出て、舞ぶり、ぬれ事、つめひらき、口上、やつし事、せりふ等芸中心の評判記へ変わっていく過渡期にあることがわかる。

更に、元禄年間の『役者大鑑』『役者大鑑合彩』では、

○前評げいのくらしいをみて上中の二段にわかち。紋下におゐてこれをするすいま此新評には中のうち(ニノオ)にて又二段にわかち紋下におゐて中の上をしるせり

とあるように前評、新評と細かく位附をし口上、せりふ、舞ぶり、狂言等の芸について評判を記している。

元禄七年『役者節用集』では、所作事、やつし事、武道事、ぬれ事、実事、愁嘆事、せりふ、口上など具体的な項目で評判を掲げていることが特色である。

形式的にみると漢詩(五言絶句、七言絶句)、和歌、舞台絵などで容色をたたえたものがあり、演技批評に徹していないといえる。

三野郎評判記のことわざ

評判記の書き方について『野郎立役舞台大鏡』の凡例の中で

一先輩立役をのぞみて野しうの評をかき友りんき虫めがねなど題して世にひろむしかれども作者の智のいたれるをじまんにや詞花言葉の文法にのみか、わつて野しうのげいを評する事わづかなれば水鳴が猫に小判の口上尤也今此評判は一切文法にか、わらず世俗のことわざ平言葉をもつてげいの善悪を第一と評す(凡ノ一ノオ)

とあるように芸の評に世俗のことわざを用いていることが指摘できます。

評判記は言うまでもなく役者の評判であるので、ほめるときとけなすときがあるのは当然であろう。

野郎評判記で用いられていることわざ八十例の機能的分類は後述するとして、役者の評判の中で、ほめている場面とけなしている場面に用いられていることわざを指摘したい。

A ほめている場面に用いられていることわざ。見出しは故事ことわざ辞典(東京堂)によった。

1 古川に水絶えず

なにわにつけて風流なるはげにも清き玉河のふるかわに水たへぬ成べし(野郎大佛師)

玉河主膳の風流なることの評。

2 花中の鶯舌は花ならずして香はし

舞台の水の露はらひにうすもの、袖をひるかへし、ちやせんがみのふりよく花中の鶯舌は花ならずしてかんはしや(役者評判蠅巻)

竹中初之丞の舞台の評判。

3 情は人の為ならず

むよくしてなさけふかし寢になさけは人のためならずとは此君にて思ひあはずれ(新野郎花垣)

4 人の噂も七十五日

七十五日と申には世の取沙汰もやむといへど此の人の事終にいひやまずきれいな口上に(難波の白は伊勢の白粉)

鈴木平八の評判のよさが続く。

5 鬼神を感ぜしむ

舞台崎の口上。あざやか成弁舌には目にみへぬ鬼神を知らげ。武士の心をなくさめ。夫婦の情しることも今顔見せの一徳なり。(難波立聞昔語序)

口上、あざやか成弁舌の評判。

6 賢臣は二君に仕えず

沢村花井の御両人あつばれ心中の通たわかしかしゆがた嵐座へ来られ

てより此かた外をしらず賢臣二君にまみへぬ役者とわ此二人なるへし（野良立役舞台大鏡）

花井才次郎の嵐座での評判。

7 麻につるる逢

あさにつる、よもきとやらん面体のうつくしき目もとにしをのこばる、ふぜいあたかも小太夫にひとしければ（野良立役舞台大鏡）

伊藤庄太夫の面体の評。

8 武士の心を和らげ鬼神も袖をしぼる

わかしゆざかりの花もさきほひもふかき口上ニはたけき武士の心もやわらげ鬼神も袖をしぼる風情あたかも春雨桃花をひたすにたり（野良立役舞台大鏡）

坂田藤九郎の口上の評判。

9 夜目遠目笠の内

夜目遠めいつも十六七三様の御事かくれなき事なれば今更申もくだそふな（野良役者風流鏡）

中村七三郎の伊達男ぶりの評。

10 父父たり子子たり

しかれともかたみにのこす跡目の六法さりととは御親父のすきうつし父ち、たれば子こたりとは此人なるへし（役者大鑑三）

立役 嵐三右衛門の親父ゆづりの評判。

11 悪に強ければ善にも強し

口上のいきぎよきこと仏法のひき事は智度論もそらにおほへ。ぶだうのつめひらき悪にたいして善をす、むるひきことは（役者大鑑ニ）

光瀬左近の武道事の評。

12 所変われば品変わる

しかし所かはればしなはると京にてみしよりは大阪のつとめ一

きわよくみゆるはめでたし（役者大鑑三）
尾上主水の評判が場所によつて変わる。

13 移れば変わる世の習

うつれはかはる世のならひ二三年前まで山本勘太郎がおも役をすれば、そのしりにつき。あどうちていられしが、いつぞのほどよりか。げいしだいにあがり（役者大鑑三）

若衆方 山下才三郎の芸の向上の評。

14 瓜の蔓に茄子はならぬ

まづ御しんぶ名左衛門は女かたにて名をはつしたまふその手すじとして若しゆがたをつとめ給ふことうりのつるになすびうらおもて相違せり（役者大鑑合彩）

若女方 松本兵衛の評判。

15 人は一代名は末代

心をつくれれば其とをり何をさしてもよくこなさる。人は一代名は末代。さすがの荒木此人を抱置る、事、分別の分に百貫目あり。

（役者大鑑合彩）

若女方 谷島主水の諸芸の評。

『古今四場居色競百人一首』の龍本金吾にもある。

16 地獄の沙汰も金次第

わかしゆふりは元禄ちこくにも其きた有との御評判は（古今四場居色競百人一首）

猿若中村勘三郎の若衆ぶりについての評判。

17 枳壇は双葉より芳し

此むすこ伝吉の惣領誠にせんだんは二葉ばよりかんばしいと云にたがわす名人の子なればこそそれぞれのつじつまを合いつて（古今四場居色競百人一首）

宮崎清吉が子どもの時から人並みにすぐれていることの評。

18 輕濛濛して影唇を動かす

おつと見えまして三尺の紫巾面をさへぎり輕濛濛してかけ唇をうごかしそれぞれといわ井花之丞第一生れつきうつくしき事(野良閨相撲)

岩井花之丞の容色の美しさの評。

19 目明千人盲千人

姿を見ぬ盲はしらず目あき千人此君の芸上りたりといはぬもの一人もなし(野良閨相撲)

沢村小伝次の芸の上達の評。

Bけなしたり忠告する場面に用いられていることわざ。見出しは故事ことわざ辞典によった。

20 蓼食う虫もすきずき

いつもはらたちたる顔つき也芸もおもはしからすとおりなり。わろしされともたてくふむしもあれば。心をしく給ふな(野良虫)

平田市太夫をけなし慰めている。

21 一眼の亀浮木に逢ふ

盲亀の浮木に。あふ事のたとへ一切きやうに。あまた所にとかれればそれにひとしからん(野良虫)

平田市太夫を慰める。

まことにいちかんの亀のふばくにあひ海月がほねとやらんにてかかる大舞台をふむ事おもひもよらぬ事なりき(役者評判蚰蜒)

南北さふの大舞台の評。

22 井の蛙

かゝる事しらざるは、石壺の中にて年月を送り、井の中の蝦蟇のたとへ誠なるへし、いひつゝ、くれは悪口に似たれと(赤鳥帽子)

井蛙恰似レ望三天涯一(風流體)

23 下手の長談義

申たき事やまく／＼なからへたのながだんぎあた、まりの引ぬうち
に引て入ましょやつとこさのまひ(役者評判蚰蜒)

南北さふへの批評。

24 鳥なき里の蝙蝠

此君いなかありきて鳥なきさとの蝙蝠とやらんにてそのま、さ
かい町に出れとも芸こましやくれ物いひひにてやさしき面て
いみへす(新野郎花垣)

高山権之助の芸、面体の評。

25 鶴の真似する鳥

わろう心得たら鶴のまねの鳥三足の天津影踏かぶらしたためしも
あり似ふたやうにたゞ人に笑はせてお暮しや(難波の白は伊勢の白
粉)

若衆方 岡田左馬助に忠告する。

26 金言耳に逆らう

惣而子共は打つけをおむくにやつて次第にはりを見せつけよと夢
介が金言耳に残るのふ左馬の介殿合点で御座らう(難波の白は伊勢
の白粉)

岡田左馬助に対する金言。

27 背中に腹を代えぬ

中将姫三番続立入みれば又れいのおい。身もたまるまじといへ
ば。せなかに腹は替られぬ。是を一種の思ひ入とや。はやらぬ時の
一げい則見物なつむが仕合(難波昔語三番続)

荒木与次兵衛のはやらぬ一芸についての評。

28 玉に瑕

今地舞台のたてもの今年給金三十五兩。されば玉にきず少の事も
人のゆるさぬ事ぞかなし。諸芸物淋敷ぼくりの足のことく。(難波
立聞昔語)

花井才次郎の評判。

扱山下にも玉のきずある諸芸。どうみても枕言葉がお、くてせりふやつし實ともにながし。(難波昔語三番統)

山下半左衛門の諸芸についての評。

29 鋸屑も言えは言う

顔見世の口上ちやちにきこえたといふ人ありいかさまおがくずもゆへばゆはる、ならひそのやうなやくにた、ぬ事はしやんとねちあけて(役者大鑑)

立役 坂東又太郎の口上の評。

30 一升入る瓢は海へ行つても一升

もとすみよしやの太夫なればさつそく諸げいあがりさうなものなれども。老斗升にはよけいもいらす。しかのみならずものいわる、にあとをひきしたるうてきのとくと云々(役者大鑑三)

若女かた 萩野左馬丞の諸げいの評。同じく「役者大鑑合彩」にもある。若女方 玉沢左源太の評に用いられている。

31 寸善尺魔

物には寸善尺魔の世のならい林の介をめつらしうおもふゆへ戊の霜月より当春にいたるまで江戸中林の介ぎたてくらすゆへ此君のさたうすし(役者大鑑)

若衆かた 猿若小三山郎の評判が落ちる。

32 麒麟も老いては駕馬に劣る

きりんもおいぬればとばにおとるとや此人一きとうせんのだたせし人なれ共今はたれ一人よしとほめず(役者み、かき)

山川彦左衛門の評判がさがる。

33 闇の夜の牛

その芸一風かはりすく人まれなり。物ごし落ついてよけれどもやみの夜に火打箱にあたるがごとし(役者大鑑合彩)

立役 西村弥平次の物ごしの評。

34 石部金吉鉄兜

此太夫そろばんをよくはぢきおぼへられて。しばい事万事に損する事いしべ金吉なり(役者大鑑合彩)

立役 荒木与次兵衛の固い一方の評。

35 濡手で粟

なに事もぬれ手であはいつそきへろといふ事か(野郎揚弓)

伊藤小太夫への批評。

36 移れば変る世の習

ふじ色のきぬのそめもの色々ニうつればかはるならい有とて此君を評ニのせん事こそつらけれ(やくしや雷)

若女方 森川ふじ枝のおとろえの評。

37 痒い所に手が届かぬよう

なんヲいわば武道のつめひらき少ぬるく見へてかゆき所へ手と、きかねたるやうなり(やくしや雷)

中村七三郎の武道事の難点。

以上三十七例がほめている場面、けなしている場面に用いられていることわざであるが、残り四十余例について機能的分類に従つて列挙してゆこう。

(経験的諺) 長年の経験の伝達のために用いられることわざ。

38 桃栗三年柿八年人の命は五十年(役者評判軸)

39 世の取さたも七十五日にはい、やむ(難波昔語三番統)

40 色かわれば品ちがふ(野郎立役舞台大鏡)

41 恋はくせもの(野良関相撲)

(教訓的諺) 実生活の知恵をあらわすことわざ。

42 瓜田に沓をいれたるの戒め(赤烏帽子)

43 正直の頂には野良の太神もやとり給ふ(赤鳥帽子)
神の代わりに野良の太神が用いられている。

44 孟母か三遷(赤鳥帽子)

45 過たるは不レ及にまさる(赤鳥帽子)

46 ちしやのほとりのわらんべはならわぬきやうをよむ(難野郎古た、み
たみ)

47 ぜんあくはともによる(難野郎古た、み)

48 うとうももうものりの道(難野郎古た、み)

49 げんさいをみてくわこみらいをしれ(難野郎古た、み)

50 和光の塵やほこりにうつもれ(野郎大仏師)

51 果報寝てまつ(難波の白は伊勢の白粉)(野良関相撲)

52 子故の闇にまよふ身(難波昔語三番続)

53 すんせんしやくまの世のならい(野良立役舞台大鏡)

54 しらぬがほとけ(野良立役舞台大鏡)

55 神は人の敬によつて威をます(野良役者風流鏡)

56 ふるきを改めあたらしきを知て(古今四場居色竟百人一首)

57 ひんすれはどんするならひ(風流鏡)

58 恋ちのさはかね次第(野郎揚弓)

地獄が恋にかわつたものか。

59 ころばぬさきのつゑ(野郎揚弓)

60 かべにみ・しやうじに口有り(役者節用集)

(遊戯のことわざ)「たとえこと」とも言われ、野郎評判記の中で
は、教訓のことわざと並んで多く用いられ、この二つで大半を占める。

61 まなふものは牛毛のことく多くなるものは鱗角のことし(野郎虫)

62 盲亀の浮木にあふ(野良虫)

63 きのふのせんしやう、けふの借銭の淵となる(赤鳥帽子)

64 おもふ事はねばはらふくる、わざ(役者評判蜘蛛)

65 花待得たる優曇くらい(難波の白は伊勢の白粉)

66 光陰矢のごとし(難波の白は伊勢の白粉)(難波昔語三番続)

67 わたりに舟(難波の白は伊勢の白粉)

68 猫に小判(野良立役舞台大鏡)

69 車の両輪(野良立役舞台大鏡)

70 馬のみ、に風(野良立役舞台大鏡)

71 世の中何か常なる飛鳥川(野良立役舞台大鏡)

71 水の目には戸がたてられぬ(野良立役舞台大鏡)

73 くらげもほねにをふ(野良立役舞台大鏡)

74 人間万事塞翁が馬(野良立役舞台大鏡)

75 江戸みぬ京の人(役者大鏡)

76 餅はもちや(役者大鏡)

77 のちの事おいへは鬼がわらふ(役者大鑑合彩)

78 君子交淡如水少人交甘如饴(風流鏡)

79 恋のおもに(風流鏡)

80 きのふの淵はけふの瀬戸(野良関相撲)

81 きのふはけふのむかし(野良関相撲)

82 百貫の馬にもたり(野良関相撲)

注1 歌舞伎評判記集成(岩波書店) 才一卷

注2 芸能辞典、河竹繁俊監修、(東京堂)

注3 日本国語大辞典(小学館)「野郎評判記」の項

注4 世界大百科事典(平凡社) 国語学辞典(東京堂)

付記 「ことわざ」(大藤時彦氏解説)

要約したものである。御指導、助言を頂いた関係各位に御礼申し上げます。(石川県立金沢松陵工業高校)